

民話の再解釈と多様性… 文化的視点を取り入れた 物語創造の意義

美馬のゆり（公立はこだて未来大学）

キーワード

民話再解釈、物語創造、文化的表象、包摂的物語、物語教育学、AI生成物語

はじめに

本稿の目的は、「民話の再解釈と多様性」に関する事例と考察の軸を整理し、今後の研究の基盤を提示することである。今回は、ジャーナル準備号の分量制約により、議論は概括的なものに留まる。しかし、次年度のジャーナル執筆に向けて、より具体的な事例分析を行い、応用可能性の検討を深める予定である。

本研究では、民話を文化遺産として再解釈し、多様性と包摂性の視点を取り入れることで、新たな民話創造の意義を明らかにするとともに、教育実践の方法を探る。民話は、時代や文化の価値観を反映すると同時に、それを超えて新たな価値観を生み

出す力を持つ。特に、学習者が民話を再解釈し、現代の価値観に沿った新たな民話を創造することは、思考力・創造力を育み、社会の多様性を理解するための重要な教育的実践となる。本研究では、ジェンダーや固定観念、多様性の欠如といった現代社会の課題に、民話がどのように応答できるかを考察し、その教育的・社会的意義を明らかにする。

筆者は、学習科学(Learning Sciences)を専門とする研究者であり、認知科学・教育学・心理学の学際的視点を基盤としている。学習科学は、学びのメカニズムを解明し、教育や社会的実践へ応用する学問であり、本研究では、民話が多様性と包摂性を推進する手段としてどのように機能するかを探る。

本研究の背景

本研究の契機となったのは、筆者自身の異文化体験である。1980年代半ば、ハーバード大学大学院に留学中、邦画『赤穂浪士』の上映会に参加した際、多くの観客が感動する（と当時までは信じていた）討ち入りや切腹の場面で、会場に笑い声があがった。この反応は、民話を含む物語の解釈が文化的背景によつて異なることを示していた。同じ時期、『花さき山』（斎藤・滝平、1969）を、日本的な美しい絵と情感あふれる物語が魅力の、私の好きな絵本として友人に紹介した。すると、「自己犠牲を美德として、子どものころから刷り込んでいる」と指摘され、日本で称賛される民話が他文

化圏では異なる評価を受ける可能性があることに気づかされた。これらの経験から、民話の再解釈には異文化的視点を取り入れることが有効だと考えた。

さらに、2021年から2022年にかけてカリフォルニア大学バークレー校に研究員として滞在していた際、AIのデータやアルゴリズムに潜む偏りが社会に与える影響について議論する機会を得た。AIは意思決定の過程で、過去の学習データに基づきジェンダーや人種の偏見を助長することがある（美馬、2025）。このことから、民話にも固定観念や偏見が内包されている可能性があると考え、再評価の必要性を認識した。一方で、AIを活用して多様性を反映した新たな民話を創造する可能性にも着目するようになった。

民話の再解釈と 多様性の潮流

民話の解釈は文化的背景に大きく依存する。筆者が留学中に経験した『赤穂浪士』や『花さき山』に対する異文化圏の反応は、民話が普遍的な価値観ではなく、特定の文化や時代に根ざしていることを示している。これらの経験から、民話を再解釈する際には、歴史的視点を含む、異文化的視点を取り入れる必要があると考える。

社会的変化の中で、1960年代から1970年代にかけて人権意識の高まりが民話や絵本の修正を後押しした事例がある。世界各国で翻訳本が出ている英国の絵本『The Story of Little Black Sambo』（ちびくろ・さんぼ）（Bannerman、1869）は、ステレオタイプの描写が批判され、1970年代以降、修正版が複数出版されている。また、近年の事例として、2023年に公開されたディズニーの実写版『The Little Mermaid（リトル・マーメイド）』（Disney、2023）では、主人公にアフリカ系アメリカ人の歌手が起用され、多様性を重視する価値観が強調された。

2020年に出版された絵本『Bo the Brave（勇敢なボー）』（Woolvin、2020）は、日本の民話『桃太郎』と類似した構成を持つが、主人公が、外見ではなく相手の本質を理解しようとする姿を描いている。

この物語は、子どもたちが他者を受け入れる力を育む教材として意義を持つ。これらの事例は、民話が時代の変化に応じて再解釈され、多様性を取り入れることで新たな意味を獲得することを示している。

このような民話の変遷は、単なる時代適応ではなく、教育現場での多様性理解の促進にもつながる。

教育的観点から見た 民話の再解釈の意義

1990年代以降、国連が推進する「持続可能な開発目標（SDGs）」や多文化共生の潮流から、民話における多様性についても関心が寄せられてきている。また教育現場では、多文化的視点やジェンダー平等の重要性が注目されつつある。

こうした価値観の変化の中で、学習者自身が民話を再解釈し、現代の価値観に沿った新たな民話を創造することで、思考力・創造力を育む可能性を考えたい。再解釈を通じて、学習者は伝統的な物語に潜む固定観念を批判的に捉え、多様な価値観を取り入れる視点を獲得できるだろう。

また、近年の技術発展により、AIは学習者の創造的プロセスを支援し、多様な視点を取り入れた民話の生成を可能にする補助的な手段となり得る。AIを活用した具体的な支援例として、以下のものが考えられる。

「AIによる民話の多文化翻訳」は、学習者が創作した民話を、異なる文化的背景を持つバージョンに自動変換し、異文化視点を取り入れる手助けをする。「AIを用いた民話の登場人物の視点変更」では、既存の民話の登場人物の視点を変更し、物語の再解釈を促進することで、多様な価値観を学習者に提示する。「AIによるインタラクティブな民話創作」では、学習者とAIが対話しながら共同で新たな民話を創造し、プロットやキャラクター設定の提案を通じて、創造的思考を深める機会を提供する。

これらはAIを活用した例として示したが、学習者が同じ課題を並行して行い、結果を比較し、それらをもとに学習者間で議論をすることもできるだろう。このように、AI技術は学習者が主体的に民話を再解釈し、新たな物語を創造する過程を補助するツールとして機能し得る。AIを単なる自動生成の手段としてではなく、学習者の創造的な思考を促進する支援ツールとして活用することが重要である。

結論と展望

本論文では、民話の再解釈が現代社会の課題にどのように応答できるかを考察し、学習者自身による新たな民話創造の意義を検討した。1960年代以降に修正された民話や、2020年代の多様性を重視した作品事例を通じ、民話が時代の変化に

適応し、新たな価値を創出する力を持つ可能性を示した。また、教育的観点から、多様性理解を促進する民話の重要性について論じた。

特に、学習者が主体的に民話を再解釈し、現代の価値観に沿った物語を創造することは、思考力・創造力の向上や、多様性を理解する力を育む重要な学びとなる。さらに、AI技術の活用により、異文化視点を取り入れた、新たなプロットを生成したりすることが可能となり、学習者の創造プロセスを支援するツールとしての役割が期待される。しかし、AIはあくまで補助的な支援ツールであり、最終的な物語の再解釈と創造の主体は学習者自身であることを忘れてはならない。

本稿は、本ジャーナルが目指す「人や社会と海とのかかわり」を踏まえ、民話を捉えるための視座を提示する予告編として位置付けられる。今後の研究では、海にまつわる民話を中心に、多文化共生や持続可能性に焦点を当てた具体的な教育実践やAI技術の応用方法を検討する予定である。

民話は、過去と未来をつなぐ文化的遺産であり、学習者が主体的に再解釈し、新たな民話を創造することが、教育の場において重要な意義を持つ。本研究が、民話を通じた多様性と包摂性の理解を深める一助となることを期待する。